

作成されて以来、およそ 500 年の時を経て当国所蔵の南蛮屏風の中から発見された下張り文書。この度、その複製が、本プロジェクトの推進者である伊藤玄二郎先生による 1990 年代からの徹底した調査を経て、ポルトガル国立図書館並びにエヴォラ公立図書館に寄贈される運びとなりました。伊藤先生に感謝申し上げます。

1902 年に発見され、伊藤玄二郎先生のイニシアチブにより 1998 年から 2002 年にかけて京都国立博物館において修復されたこれらの下張り文書は、手紙から詩編、歴史的記述に至る様々な種類の文書を含むものであり、その多くは日本におけるイエズス会神父の活動に関する文書であります。その中には、「日本史：1549～1564」の著者であるルイス・フロイス神父の書簡も含まれています。

それらの文書は、ポルトガルと日本の接触に関する大変貴重なものであり、ポルトガル人航海者達が長崎に到着した 1543 年以降、両国民が緊密に交流を行った時期における日本文化の様子を私たちに伝えてくれます。

南蛮屏風下張り文書修復委員会によるこの度の 16 世紀文書の複製の寄贈は、一つの重要な象徴的出来事でもあります。すなわちそれが、何世紀にも亘り、好奇心、相手のことを知りたいという思いから発展してきた両国間関係であり、その基本的なベクトルの一つが文化に向けられた両国間関係であることを象徴的に示すものであります。

南蛮屏風図において、日本人が南から来た“蛮人”を眺めているというイメージは既によく知られているところですが、その時期、ポルトガル人航海者達は、遠く離れた東洋の地に関するヨーロッパにおける知のフロンティアを拡大しようとしていました。そのイメージの際立って目新しい特徴は、それまでのヨーロッパ中心主義的視点ではなく、まさに他者が我々西洋人を、そして我々の習慣・風俗をどのように捉えているかを示してくれている点にありました。つまり、それらは、一つの歴史的現実を知るための基本的な視覚資料であり、同時に、大きく異なる背景を持った二つの文化・文明の邂逅を示す資料でもありました。

南蛮屏風の図柄に、当時の様々な歴史上の人物により著された記述を重ね合わせることができます。そして、16 世紀末から 17 世紀初めにかけての日本とポルトガルの接触に関するこれらの文書の解釈の可能性が現実のものとなったことは、大変貴重で重要な意義を有するものであります。

両国民、そして二つの異なる文化は、当初は無知がもたらす好奇心と不信感で相対していたものの、その後緊密な対話と、それぞれが相手を新たな現実に誘おうする努力により関係の基盤を構築しました。そしてこの度、長きに亘る実り多き友好関係に、さらに新たな一歩を刻むことになりました。

個人間、国民間の関係は、シンボルを以って形作られるものであり、ポルトガル政府は、この象徴的イベントを大変重要なものと考えます。両国民が文化を通して互いをよく知り、相互関係がさらに発展するよう努めてまいります。

そして、本イベントが両国民をさらに豊かにし、互いの距離を近づけ、新たなプロジェクトへの下地となり相互に裨益するイベントであることを確信いたします。

南蛮屏風下張り文書レプリカ贈呈式

シャヴィエル文化担当副大臣挨拶（仮訳）

改めて、関係者の皆様にお礼申し上げます。

ジョルジェ・バレット・シャヴィエル

文化副大臣